



# Black Memory

---

比良井 しほり

---

## 第1話

---

世は戦乱に続く戦乱に荒廃しきっていた。

人類は消して手を出してはならない禁忌に手を染めてしまった。――遺伝子操作。より強い戦士を作るために繰り返し実験が行われた。その結果、ゆっくりと、しかし確実に人類は混乱しはじめたと言っても過言では無いかも知れない。遺伝子操作によっていくつもの化け物が生み出された。異様なほど屈強な者。異様なほど賢い者。不思議な能力を持つ者。

子供が生まれる時にはより強い子を残すために遺伝子操作を行うのが国として推奨された。結果、歪んだ遺伝子が多くの問題を起こし始めた。思考に異様なほどの偏りを持つ者。感情が操り出来ない者。善悪の見分けがつかないもの。暴動――政府は力を失った。

乱れた世の中では、人はすぐるものを探す。宗教であったり、力強いものであったり。何が正しくて何が間違っているのか。混沌とした世の中で、人は光を見失い、壊れていく。かりそめの夢にすがって現実から逃げるのか、ただ流されて己さえも傍観して現実から逃避するのか。

世界規模の巨大組織『アヴォール』。知らぬ者はいない、強大な組織だ。巨大組織を取り仕切るのは少数の幹部のみであった。本当の組織の目的は、一部の幹部以外の者には知らされる事はなかった。組員に伝えられるのは、すぐるための強さであったり、英雄気分させる甘く魅惑的な夢であったり。そのために組織は溺れ藻掻く者に、さも浮き輪であるかのように見せるのみ。それが本当であろうとなかろうと、組織には関係のない事だ。ただ、すがってさえくれればよい。ただ、動いてさえくれればよい。組織の思うように。所詮、すぐるしか能のない現実逃避した弱い生き物たちなのだから。

雲ひとつみつかからない、晴れ渡る日の事だった。アヴォールからの命により、二人の少年が田舎の小さな村に、ある任務のため派遣された。少年たちは村から少し外れた大きな岩陰に土色の小さなテントを張り、村の様子をうかがうことにした。

村の周りの土地は荒れており、周りには殆ど食物らしき植物がなかった。テントの様な移動式の家が集まる村には、不思議な事に農地がある。農地を観察するに、植物の実り具合はあまりいいとは言えなかった。きっと村の土壌がひ弱なのなのであろう。農業で生計を立てているらしい村にしては、否が応でも貧しい生活が余儀なくされるであろう事は軽く想像が出来る。居住している村人も少なく、多く見積もっても70人にもいかない事だろう。

「こんな村があったなんてね」

二人のうち一人、テイル・イブリースは呟いた。

戦に続く戦で、小さな村などは把握されていない事が多い。地図にもない村ということだ。

テイル・イブリースは、少し前に入隊したばかりの14歳の男の子だ。赤茶色い髪はさらさらで、鼻にはそばかすがある。白いTシャツに、だぶついた黄土色のズボンをはいた幼顔の彼も又、強い者にすぐるように組織に入隊した一人だった。入隊して少なくとも一ヶ月は、簡単な事務処理――いわゆる雑用をさせられる。今回は初めての派遣任務で、いても立っても居られな

い程緊張していた。

岩陰に這いつくばるように構えながら、テイルは汚れて壊れかけた双眼鏡から村を覗いていた。ふと横からの太陽光が遮られて、双眼鏡を下ろす。隣を見上げると太陽の光を遮るようにして、立っている幼さ残る顔の少年は、シャツに黒いジャケット黒いズボンを着崩した黒髪の、キラと言う少年だ。

「派遣は初めて？」

あまり年の変わらなさそうなキラの言葉に、テイルは頷いて見せた。

「えと……名前、何だっけ？」

顔合わせの時に自己紹介はしたし、来る途中にも確認をされて、名前を訊かれるのはこれで三回目だった。テイルは自分の口が尖るのを感じながら、尖るものは尖るままに答える。

「テイルです！」

自分が入隊する少し前に入隊した先輩と気遣って、テイルは丁寧語を使った。

「怒った？ 俺、名前覚えるの苦手なんだ」

名前を覚えられないというのは、なんだかバカにされている気がしてテイルは悔しかった。

「先輩は、何回くらい派遣されたんですか？」

派遣前に年もかなり上の組織の先輩に言われた事を思い出す。

キラと行くのか？ あのガキ、すげえよ。怖いくらいな――

怖いくらい凄い？

テイルは隣に立っている少年を改めて見上げた。大あくびをしている。テイルの視線に気づくと、キラは肩をすくめて見せた。

「あ、派遣された回数だっけ？」

自分と年も変わらない少年だ。悪い奴ではなさそうだし、正直〈怖い〉という発想には到底行き着かなかった。

「そうです」

「忘れた」

呆れる答えだった。どんな任務にせよ、組織内で自分が仕事をした回数を忘れるなど、信じられなかった。先輩の多くは、自分の勇姿を後輩に雄弁に語りたがるし、些細な任務は気づけば誇張され、大儀になって聞かされる事が殆どだ。また、自分も任務を終えた暁には、後輩に自慢して聞かせようと、テイル自身も思っていたというのに。

「んー……と、初めてじゃないのは確か」

初めての任務に緊張をしている自分も、回数を心に刻むように覚えていこうと、そんなことを考えていた自分をあざ笑われているようで、テイルは気分が悪かった。

「失礼ですが、先輩。立っていると見つかるかも知れないんで、座ってください」

尖った様な声をぶつけたのに、キラは全く気にする風もなく、「ああ。そうだな」と言って素直に座った。

この村の側に来てから、村をうかがう様子もキラには見受けられない。やる気が無いのか面倒くさそうにあくびを繰り返している。

先輩は俺をからかったんだろうか。話していても苛々する。だからといって、話す相手はキラしか居ない。初めての任務に、意気込みもするし緊張もする。

「今回の任務は、どういう意味があるのでしょうか？」

任務の内容は、村を全滅させよというものだった。何故かなどは伝えられていない。特に、入ったばかりのテイルが上層部に質問など、出来る訳も無かった。近い年のキラが何か伝えられているとは思えなかったが、自分よりは先輩なのだから何か情報を持っているかもしれないし、憶測でも何かあるならば意見が聞きたかった。

「さあ？」

キラは岩陰に眠そうにもたれかかった。

キラの気のない返事で、会話は簡単に途切れてしまった。納得しきれないテイルの思いは顔に表れていたのか、キラはこちらを見て笑った。

「関係ないだろ？ 任務の意図なんて。あの村潰す事に変わりはないんだし」

確かにそうだけれど――。と、テイルは口ごもってしまう。組織に自分がどれだけ貢献したかと、後に雄弁に語るためにも必要な情報なのだ。自分が如何に重要な任務をこなし、如何に組織に有効な存在であるかを、後輩に、先輩に、上層部に、組織に、そして何より、自分に知らしめるために。

「爆弾は用意できてる？」

組織に入隊してテイルが期待されたのは、手先の器用さだった。戦闘力は高くはない。遺伝子操作による能力もない。遺伝子操作が無い者はむしろ珍しく、一部で神の子と言われたりもするが、テイルは全く嬉しくなかった。遺伝子操作でそれこそ魔法じみた特殊な能力を使える者も多くいる中で、神の子は非常に脆弱な存在だった。政府が力を失い、物資も手に入りやすくなると機械的な武器というものは衰退していった。小さな機械武器を作るのがやっとのこの世の中では、強い能力者に到底叶わない。しかし、遺伝子操作による力のないテイルにとって、機械武器こそが自分を守る唯一のものだと、小さな頃から必死に勉強してきたのだ。

「勿論です」

「ふうん。俺は、そのまま突っ込んで潰す方が性に合ってるんだけどな」

自分の大切なものを『本来必要ない』と言われた気がして腹が立った。

「上から言われた作戦ですからね！」

つい、ムキになった。キラの腰には、身なりからは想像できないような無骨な剣がくくりつけられている。まだ完成しきる前の幼さ残る体に、ずしりとぶら下がるようにして。遺伝子操作で大きな剣を扱い切るだけの力があるということなのだろう。

キラは驚いたようにテイルを見て小首を傾げた。

「知ってるよ？」

自分の感情がから回っている気がして、余計にイライラした。

「決行は何時にしますか？ 何時でも準備は出来ていますけど」

キラを責めるように、作戦の細かな計画を詰め寄った。

「今夜」

ドキリとしてテイルはキラを見た。詰め寄ったつもりがさらりと返されて、なおかつ初めてのことで、いよいよかと思うとどうしようもない程緊張をしてしまった。

「ずっとここに居たって仕方ないし。爆弾あるんだろ？　じゃ、今夜じゃん」

ちょっと近所に買い物に、というくらいの軽さでキラが言った。

「そ、そうですけど……いよいよ、ですね」

ごくりと生唾をんだ。初めての任務。村の壊滅。握る手に汗がにじむのを感じた。

「じゃ、夜まで俺は寝るよ」

キラはひょいとテントの中に入り込んで行った。

テイルは、つい話し相手を求めて後についてテントに入った。中は人が二人ぎりぎり寝られる程のスペースと、所狭しとテイルの作った爆弾が転がっている。照りつける太陽のせいで、むありと熱を帯びた空気が充満していた。

「うへえ。あっちいなあ。入り口開けた方が風通るか？」

キラは風通しを良くしようとテントをいじりだした。

あっという間に汗がへばりつくようにあちこちににじむ。しかし、テイルはそんなことかまう余裕もない。

「何故、組織はあんな小さな村を潰そうとするのでしょうか？」

先程似た質問をした事も忘れ、緊張のあまり繰り返す。

「知らねえって」

キラは面倒くさそうに答えた。

「何故、このような貧しい土地で農業を糧にあの村は生きていこうとするのでしょうか？」

「それも知らねえ」

会話になどならなかった。元々会話する気など無いのかも知れない。キラはテント内の風通しを確保すると、さっさと横になってあくびをかました。もう話しかけるな、という合図にも見えた。

テイルは小さく舌打ちをすると、テントから出て岩陰に身を隠し、双眼鏡を覗く。

目に飛び込んでくるのは、相変わらず貧困で地味な日常生活風景。何故この様な不毛な土地に留まるのか。少しでも移動すれば、ここよりは肥沃な土地があろうというもの。テイルは色々な事を思い、時折、爆弾を仕掛ける場所をもう一度頭の中で復習したりしながら双眼鏡を覗き続けた。

どのくらい双眼鏡を覗き続けたらろう。あまりに考えを巡らせすぎ、目の前に飛び込んでくる光景は、車窓の光景のように気にもとめなく成る程、ずっと見続けていた。ぼうっとしながら見ている中で、ふとある場所に村人が何人か集まっている事に気がついた。いったい何事かとじっくり覗けば、少し異様な様子が見受けられた。

一人の男を中心に、輪を作って人だかりが出来ている。真ん中の男はあちらこちらへ、輪の中をよろよろと動き回る。何か芸でもしているのか？　と、最初は思った。しかし、どう見ても男

は苦しんでいる様だった。腹をおさえ、胸をおさえ、顔は苦悶に歪んでいる様にも見える。しかし、他の村人は苦しむ男をどうする訳でもなく、ただ遠巻きに眺め、中には祈るようにしている者さえいる。

「なんだ。あれ……」

背筋がぞっとする。嫌な予感がした。行きたくない。あの村には行きたくない。心からそう思った。

目が離せぬままずっと男と村人の行動を見ていると、ついに真ん中の男は膝をついた。苦しそうに腹をおさえ、胸をおさえ、やがて喉をおさえ、痙攣を続ける。次の瞬間。男の顎がはずれんばかりに――否、間違いなくはずれているのだろうが、大きく開いたかと思えば、ぼとりと、口から得体の知れない何かが抜け出た。がくりと男は倒れ込む。黒くぬめぬめとした、太く長いトカゲにも似た生き物。生き物はちょろちょろあたりを周回し、集まっていた村人は凡てひれ伏した。

やがてその生き物が誰かの体へとよじ登ると、登られた者はそっと生き物を手にして立ち上がる。生き物を手にした男は、なにか口をぱくぱくと動かして喋ったかと思えば、口の中へ生き物をぬるりと入れた。

「なっ……！？ 何だあれっ！」

混乱のままテイルは叫び、信じられない異様な光景にふわりと意識を失った。

## 第2話

---

白く塗り固められた四角い建造物。アヴォール本部。大きな建物の中、とある一室。幹部と言われる男の仕事場は、他の組織員の仕事場などとは違う、遙かに優遇された空間だった。茶色い絨毯が敷かれ、ゆったりとられたスペースに、焦げ茶色の重厚な机が置かれている。机の前に座っているのは、蛇のような顔をした総督。

総督が机で書類に目を通してしていると、重々しいドアが叩かれる音がした。

「なんだ」

答えると、部下が扉を開けて入ってくる。

「失礼致します。仰いました書類をお持ち致しました」

総督は口の中で小さな音を発し、顎で自分の机の上を指した。部下は示された通りそっと机に書類を置いて、ふと言ひ難そうにもぞもぞしてから切り出す。

「あの」

「なんだ」

総督は書類から目を離すことなく答えた。

「いえ、たいした事ではないのですが。本日の任務65は、一体どういった理由がおりなのでしょう」

任務は日ごと番号で区別されていた。総督は目を書類から離すことなく、一体どの任務だったかなと考え、顎を触った。やがて思い出して、顔をあげて目の前の男を見た。腕っ節だけの、愚鈍そうな男である。言われた通りの事はきちんと出来る、言い換えれば言われた事しかできない、ある意味では組織に望まれた、優秀な男だ。

「キラ・ブルーレイズと、テイル・イブリースを派遣させた任務かね。何故理由を？」

総督の言葉に、男はかしこまって頭を下げた。

「は、はい。確か、地図にもない小さな村を壊滅させるとか」

「私は何故理由が知りたいのかと尋ねたのだ」

総督は机に肘をついて手を組んだ。相手の様子を伺う。慌てた様に深く頭を下げる。

「はい。その……理由が想像できず……」

男は一度言葉を切った。総督は敢えて何も言わずじっと男を見据えた。男は言いにくそうに顔を曇らせ、えいとばかりに続きを絞り出した。

「仲間と賭を」

なんだ、くだらない。と総督は低い声で笑った。

「で、君は何かで負けて私に訊きに來た、というところか」

「申し訳ありません！」

男は慌てて低く頭を下げて一步下がった。

気楽なものだ。なんて愚かな部下なのか。しかし、愚鈍な方が使い勝手がいい。総督はその思いを相手には悟られないよう努める。

「面白そうな遊びだ。もし、誰も賭けていない答えであったならば、お前は どうする？」

総督の言葉に、男は大きな体を必死に小さくして考えるように間をおいて答えた。

「……は。その際は、総督に掛け金凡てを」

「よろしい」

総督は笑った。所詮小銭だろうが、話に乗っておいたほうが下手な詮索もされまい。

「ちなみに賭けた者は、どのような理由だと考えているのかね」

男は戸惑いながらも答える。

「はい。村に金塊が隠されているだとか、組織から逃げ出した者がいるだとか、その類です。ちなみに、私は村に重要な情報が隠されて居るのだと思っております」

所詮その程度。総督は笑った。アヴォールが子供の英雄ごっこのような理由で動くはずもない。

アヴォールには目的がある。秘密裏に更に遺伝子操作の研究を続けること。当人の意思を持たない屈強な特殊能力戦士を量産すること。そして、新たな政府機関として君臨すること。必要が無くなった戦士は今も内密に人体実験に使われ続けている。より強大な戦力を手にしたら、全てを配下にして行ける。

「あの村には邪教がある」

一言で答えてやった。男は理解できないようで、何とも間抜けな顔をして見せた。

「村では新しい邪教が流行っておってね。邪教は世を乱す。何も知らぬ純朴な者達の心を浸食し腐らせる。それを防ぐために壊滅させるのだよ」

男は色々考えを巡らせるように目をくるくると回した。

「それで……壊滅、ですか？　しかし、宗教なら別に壊滅させずとも……」

言ってしまうから、男は我に返ったのか慌てて「申し訳ありません」と深々と頭を下げた。

「単なる宗教とは違って何か特殊な様だと話は聞いている。今はまだ小さくとも危険な芽は摘んだ方が良く。世の平和のために」

「左様でございましたか」

男は、ほけっとした表情を浮かべた。

実際、怪しい宗教で小さな村が成り立っているというのは間違いが無い。アヴォール以外にすぎるものは消しておきたいという意向も当然ある。しかし、今回の任務のもう一つの目的はキラ・ブルーレイズが存在だった。遺伝子操作の中でも彼は特殊な強い能力を持っているという。小さな村ではあるが、本来なら子供2人に任せるような任務でもない。しかも相手につけたのは遺伝子操作の能力もない神の子と言われる新人のクズ。果たして任務を全うできるのか――キラ・ブルーレイズ。

「どうだね？」

総督の言葉に、理解出来ないと言うように男がキョトンとする。全く、一から十まで説明しなくてはならないとは。総督は低く笑いながら訊いた。

「正解した者はいたかね？」

ようやく気づいた男は、慌てて頭を下げた。

「は、はい。掛け金は凡て総督に」

「結構。さがりたまえ」

男は一礼してそそくさと出て行く。

正義ごっこ、英雄ごっこ、はたまたスパイごっこ。何でも良い。愚かな勘違いは大いに結構。偽りの夢でも希望でも持って、すぎるがいい。組織は、その思いを利用する。利害一致と言うべきだろう。溺れる者は、藁でもすぎる何かがあるのだ。組織は幻想の浮き輪を与えてやる。

しかし……と、総督は顎を触った。キラ・ブルーレイズ。志願した者、勧誘した者。組織に所属する者は多く、彼がどの経緯で入っているのか今となってはよく解らない。ただ、共に任務をこなした部下達が、揃って青ざめて少年の功績を認めた。だいたい愚鈍な部下達は、他の者の功績など認めたららない。自分が自分だと、よりすぎる浮き輪を掴もうと足掻くからだ。

以前、一度だけ見掛けたキラは、部下の中では少々毛色の変った印象を受けた。まだ幼いながら、気の抜けたような瞳だったことを覚えている。すぎる素振りは全く見受けられなかった。足掻いても居ない。上司に媚びる事もなく、キラは適当な返事を返していた。

全てどうでもいいとでも言う事か――。

総督は笑った。使えるうちは使うのみ。

今回の戦果によっては、キラを昇進させることも考えてみよう。どうでもいい――それは変えさせねばならなかった。何時かどうでも良くなる可能性を持っている。極力、すがるように。部下にとって、組織は必要なものでなくてはならない。力ある部下ならより一層だ。出世欲でも出てくれば、しめたもの。存在意義をこの私が与えてやろう。所詮、15かそこらの子供の話だ。手玉に取るのは容易いはずだ。総督は低く笑うと、再び書類に目を通し出した。

### 第3話

---

太陽はいくらか傾き、力を弱めだしていた。熱い空気は近づく夜の風にいくらか冷まされ、ぬるくなってくる。村近くのテントの岩陰で、テイルは自分を揺すられるのを感じてそっと目を開けた。目の前に、キラの呆れた顔が覗いた。キラの肩越しに、暗くなりはじめた空が見える。あと1時間しないうちに夜がやってくるだろう。

「こんなところで寝ていたのか？ 双眼鏡を持ったまま」

呆れた様なキラの声で、テイルは現実にと引き戻された。慌てて自分の片手を見ると、古ぼけた双眼鏡がしっかり握られている。気絶したのか。額を拭えば、汗でべたりとしていた。熱さのためか？ 違う。汗の質が違う。これは冷や汗だ。異様な光景を見て、冷や汗をかいて気を失ったのだ。

「……あ、あ……あの村、お、おかしいです」

キラに伝えなくては。あの村はおかしい。絶対に、おかしい。喉がカラカラに乾いて、かすれた音を必死に押し出した。

キラは驚いた顔を見せる。少し間をおいてからキラは肩をすくめて、チラリと村を見て嘲笑するように言った。

「この世界は今や全部がおかしい」

「そんな事じゃなくて！」

不気味な光景だった。何かをしている。あの村では、何かが行われているのだ。想像を超えた何か。

しかし。と、テイルは考える。はたして真実なのか？ 本当に自分の目で見た光景は確かなのか？ 黒くぬめった、動く物体の存在は。口に入れて呑み込む村人を、まるで崇めているような光景だった。嘘だ。嘘であって欲しい。全ては夢だったのだと。疲労と、緊張と、太陽の熱のあまり、朦朧として幻を見たのかも知れない。

地面を見ていたテイルの視界に、キラの顔がぬっと入った。

「何があった？」

テイルは話す気にはなれなくなっていた。頭を掻きむしって、自分を落ち着かせようとした。そう、あれは幻だったのだと。何も無かったのだ、と。

「な、何でもないです。……すいません。へ……変な夢を」

自分の声はまだ震えているのを感じた。

「そっか。ならいいけどさ」

キラは肩をすくめて準備に取りかかりはじめた。

準備をするキラをぼんやりと眺めながら、テイルは体が動かなかった。準備をする……村に行かねばならない。行きたくない。――いや、あれは夢だ。夢でも、行きたくない。

「早く準備をしろ」

それほどの事前準備を必要としていないのか、キラは目の前で既に悠長な準備運動をしはじめた。

「あ……はい」

とにかく、やらなくちゃ。でも、行きたくない。行きたくないけど、やらなくちゃ。

テイルは爆弾が用意されているテントに入った。テントの中は、まだ昼間の熱が残っているようで、少しばかり外より熱が残っていた。爆弾は自分の専門だ。爆弾は自分が用意せねばならない。リモコン操作で一斉に爆破可能な小型爆弾を、ぼろ布で出来たリュックに詰めていく。詰めながら、自分の感情と戦っていた。行きたくない。あの村には入りたくない。嫌な予感がする。生ぬるい風も、もう暗くなりはじめた辺りも、嫌でたまらない。悪寒がする。嫌な悪寒だ。

テイルは自らの思いを振り切るように必死に頭を振ると、リモコンをリュック外側のポケットに入れた。それから、小型の銃を装備するためのベルトを腰に巻く。小型の銃は、古い銃を改造したテイルのお手製だ。発砲時の音は抑えてあるし、弾の補給時間を極力短くしようと弾数を増やしてある。

「出来ました」

言いながらテイルがテントから出ると、キラは大きなリュックを背負ったこちらを見て、笑いを零した。

「重くないか？」

「重いです」

突っかかる心境でもない。テイルは上の空で短く答えた。

キラの視線が自分の腰にぶら下げられたものに移ったのをテイルは感じた。

「銃、か。久し振りに見るよ」

遺伝子操作による能力を使える者の多い人類にとっては、銃など使う機会がほとんど無い。しかも、銃では遺伝子操作された一人の剣豪には叶わない。銃など使う者は殆ど居なかったが、それでも遺伝子操作された能力を持たない神の子であるテイルは銃に頼るしかなかった。

あの村に行きたくない。役に立たないかもしれない銃に頼るしか無い弱い自分が、怖い――。

この胸騒ぎは全て気のせいだったと笑えますように。テイルは心から願った。

「じゃ、そろそろ行くか」

まだ暗くなったばかりの夜の入り口。心の準備が全く出来る状態ではないところへのGOサインに、テイルはキラを見た。キラはじっと目を細めて村の方を見ていた。

「面倒だ。気づかれたかも」

キラの言葉に慌てて村を見る。村の灯りは既に全て消されていた。

「気づかれた？ 灯り、消えているじゃないですか」

「馬鹿。今、何時だと思っているんだよ」

テイルは慌てて文字盤がひび割れた、汚い腕時計を見た。時計は確かに7時を指している。陽が落ちたばかりなのだから、間違いは無いはずだ。7時……7時だって？

テイルはもう一度村を見る。村の灯りは全て消えている。人が歩いている気配もない。真っ暗だった。

「普通、あり得ない……ですよね？」

悪寒が走った。不気味な村だ。70人もいかない村とはいえ、流石に全ての世帯が、7時とい

う時間で灯りを消していると考えるのはおかしい。どう考えても、意図的にとしか思えなかった。

「とはいえ、村の特殊な規則なのかもしれないし。ま、関係ないね」

関係ない？ この異常な状態が？ テイルはふとキラを見た。端正な横顔が先程までとは違って、冷たい色を帯びだしていた。薄く細められた目は背筋が凍る色をしている。これが先程のキラ？ テイルは息を呑んだ。恐くて目を反らしたいのに、まるで蛇に睨まれた蛙の様にテイルは目を見開いたまま身動き一つ取れず、釘付けになっていた。目を自分に向けられてすらいないというのに。――殺気、これは殺気なのか？ その恐ろしい感情の矛先は、目の前の村に対してではない。村を通し、何かもっと掴めない何か――。

全て、だ。この目の前の少年は、この世の中の全てを憎んでいる。

テイルは短く浅い呼吸を三度繰り返した。何故自分は初めての任務で、異様な村とこれ程にも恐ろしい少年を相手にしなくてはならないのか。

「行くぞ」

キラは発すると、村に向かって歩き出した。

待ってください。と、言おうとしてテイルは言葉を呑み込む。今、目の前を歩く少年に声を掛ける事など出来ない。黒いジャケットの背中からさえも、ピリピリとした空気を発する少年に、誰が言葉を掛けられるものか。掛けたら最後、殺されてしまいそうな気さえする。テイルは『ついて行かねばならない』気持ちだけで、自分の心に反して壊れかけた機械の様にキラの背中を追いかけていた。早く……早く全てが終わればいい。ただ、心からそう願うのみで。

村に歩いて到達すれば、周りは異様な程静かだった。静かすぎて耳が痛い。村は、家と農地に分かれていた。20ほどの全ての世帯が集まる居住区と、全ての村人が農業をする農業区に。任務は村の全滅。居住区の方への足を踏み入れた。

もっと警戒すべきだった。簡易なテントもどきの村は、基本的に移動するためだと考えるのが妥当だ。にも関わらず、しっかりとした農耕区域が存在している。農耕区域があるのに、育ちは悪い。土地が悪いからだ。矛盾している。おかしい。全てがおかしい。

「はは。人っ子一人もいませんね」

不気味さ耐え切れず、テイルは喉の奥からキラの背中めがけて言葉を押し出した。何か喋らなくては、どうにもおかしくなってしまうそうだった。

「爆弾、仕掛けるんだろ」

返ってきたのは冷たいトーンという言葉だった。振り返りもしない。仕方なく、テイルが爆弾を取り出すためにリュックを下ろそうとしたその瞬間！

テイルは驚きと恐怖とで声も出なかった。誰も居ない筈だった。確かに、誰も居なかった。しかし、リュックを下ろそうと振り返った後ろには、気配すら感じさせなかった長い髪の小さな女の子が立っている。自分よりも、幾つか小さな女の子だ。汚く古ぼけた服に身を包む、日に焼けた肌の少女は生氣のない瞳で薄笑いを浮かべた。

「来やがったな」

キラの声が聞こえた。

気づけば、暗くてよく見えなかったが少女の後ろに沢山の村人が居る。鍬を持ち、鎌を持ち、斧を持ち、古ぼけた剣を持ち、引っ張り出した様な猟銃を持った者まで居る。いつしか周りに灯りが灯り出す。

「馬鹿！ それは起爆装置じゃないのか！？」

殴るようなキラの言葉が飛んできて、慌ててテイルが少女を見ると、少女の手には爆弾の起爆装置が握られている。

「あっ」

声を発するうちに少女は軽やかに走り去って、また生気の抜けたような目をした集団の一人に起爆装置を渡す。起爆装置を取られてしまい、爆弾は自分の背中だ。

やばい！ テイルは咄嗟に腰にかけられた銃に手を掛ける。間に合わない！ 次の瞬間、灯りの揺らめく赤い視界の中を、引き裂く様な音を発しながら電流が走った。

「ぎゃあ！」

起爆装置を手渡された男は電流をまともに食らい、叫び声を上げた。リモコンが男の手から放られる。村人の手がわらわらと起爆装置に伸びる。テイルは抜いた銃の狙いを起爆装置に定めた。くぐもったような鈍い音がしたかと思うと、小さな起爆装置が粉々に破壊された。やがて、ぱらぱらと装置の残骸は地面に降りそそぐ。

「正しい判断だ」

後ろから声がして、テイルは振り返った。キラは鬼のような形相で村人を睨み付けている。片手を軽く挙げて、手の平に小さな音を立てて先程の電流が渦巻いていた。これが、キラの能力なのか。

「囲まれてる」

短く、キラが言い放った。慌ててテイルは周りを見る。生気の抜けた様な村人達は、目の前だけではなく。後ろにも、横にも。キラの言ったとおり、確かに囲まれていた。テイルは恐ろしさのあまりに後ずさりして、どんと何かにぶつかった。ビクリとして振り返れば、年変わらぬキラが殺気を帯びた目をしている。全てを壊してしまいそうな殺気に、テイルは心臓が凍てつくような気がした。

「離れるな」

キラの言葉に、急に自分の血管が暖かさを少しばかり取り戻した気がした。自分は殺されない。そんな気がして、ほっとした。言われた通り、テイルはさっとキラの横に身を置いた。

村に灯された炎の明かりが闇夜に溶けて薄気味悪さを増す。

暗い影の中に立つ村人達は、そろって生気の抜けた目をしていた。キラから電撃を受けた男は、致命傷になる電撃では無かったのか、焼けこげた体のままゆるりと幽霊の様に立ち上がる。村人が一人、電撃によって攻撃を受けたというのに、他の村人は反応すらしなかった。

おかしい。ここは、全員がおかしい。

「—————」

男の一人が、何かを喋った。無表情のまま、ただ小さな音を羅列している。何か意味を成していたのかも知れない。しかし、言葉としてテイルには聞き取れなかった。異界の言葉のような、

不気味な音をしている。囁くような、呟くような。

「—————」

他の村人達は、呼応するように音を口から紡ぎ出す。同じ事を繰り返しているのか、それとも新たな言葉なのか、そんな事すら解らない。一步、村人達が囲む輪を縮めたかと思えば、ざっと襲いかかってきた。

テイルは思わずしゃがみこんだ。

——殺される！

堅く目を瞑る。駆け寄る足音が浴びせられるように近づく。砂煙の匂いが顔にかかった。隣で足の動く気配がする。手には汗がにじみ、心臓はぎゅっと縮んだ。死ぬ！ 殺される！

「顔を上げろ！」

どつかれる様な声を投げつけられて、テイルは我に返る。逃げなければ！ ふと目を開けた瞬間、目の前に映ったのは舞う様に散る赤い液体。地に響くような叫び声が聞こえたかと思えば、視界に男が倒れ込んでくる。生気の抜けたまま、崩れる人形のように。ただ、どくどくと首元から脈打って溢れ出る鮮血のみが、生命を感じさせていた。

へたへたと、何かが顔に降ってくる。頬にぬめる、生暖かい感触を受けて、テイルは短く叫ぶと立ち上がった。そっと指で頬をなぞる。ぬめった感触がした。生臭い鉄の匂いが鼻をかすめる。指を見れば、茜色の光を浴びて、てろてろと鈍く光を見せる赤い液体が付着している。悠長に金切り声などをあげる余裕はない。地べたには、鮮血を垂れ流して人形のように動かなくなった村人が幾人も倒れ込んでいた。

テイルはそっと両手でもって銃を構えた。カタカタと銃がぶれる。ふとキラを見ると、無骨な血のしたたる凶器を構えて立っている。この人数を一気に？ あり得ない。ほんの、ほんの一瞬だった筈。頭の片隅でテイルは思ったが、深く考える程の余裕は無かった。

「—————」

再び、理解出来ない音が村人から発せられた。呼応するように、皆が口々に音を出す。

「に、逃げ、ます、か」

耐えられない。テイルは必死に思いを伝えた。そっと見たキラは、応じるつもりは無いようで、鼻を鳴らして前を見たまま目をぎらつかせた。

「任務は〈壊滅〉なんだろ？ ただ、女子供はやりたくねえな」

答えたと思った瞬間、攻撃は最大の防御とばかり、短く小気味良い足音を響かせてキラは跳躍した。殺気を帯びた目で茜色の光を浴びながら、返り血を舞わせて飛びかかる。

——まるで悪魔だ。

村人は応戦しようと鎌を、鍬を、斧をそれぞれ振り上げる。本格的な夜が訪れようとしている空に、古ぼけた猟銃の乾いた音が、時をずらして響く。乾いた音がした頃には、既に猟銃の所有者は鮮血を吹き出して地面に転がっていた。

テイルは無我夢中でリュックから爆弾を取り出し、村人に向かって放り投げた。空中で弧を描いて落ちる寸前、銃で起爆させる。空気を振動させて、耳痛い爆発音が響く。飛んだ火の粉は、燃えやすいテントのような家に橙色の炎をとます。

無茶苦茶だった。何が起きているのかなんて、テイルには全てを掴みきる事が出来なかった。ただ、テイルは爆弾で襲い来る村人を地面に転がした。

「あうっ」

突如、肩口に走った痛みにテイルは顔をしかめた。振り向くと、鎌を構えた村人が居る。笑うのでもなく、怒るのでもなく、恐怖するのでもない無表情な村人の顔がある。痛みは直ぐに思考から消え、テイルは咄嗟に流れるように銃を構えて村人の額に弾丸を打ち込んだ。衝撃で村人は一度後ろにのけぞる形を取った。鎌が手から滑り落ち、崩れ落ちるかと思いきや、体勢をこちらへ戻してがしりとテイルの両腕を掴んだ。村人の額から赤い液体がゆるゆる零れている。彼の後頭部は吹っ飛んでいる筈なのに。遠くで自分の無事を確認するキラの声が聞こえた気がした。

「—————」

村人は又、不思議な音を発した。やはりテイルには意味が分からない。

「—————」

もう一度、何かを言いながらずると腕を掴む手が滑り落ち、テイルの足下に崩れ落ちた。何も考えられなかった。次第に自分の息が上がるのを感じる。異様なほどに心臓が冷たく高鳴り、胸を突き破って出てきそうだった。指先は冷たく、感覚を失っていく。

「うわあああああああっ！」

喉の奥から奇声が溢れ、テイルは最後の爆弾を村人たちへと投げつけた。起爆させようと、銃を構えた。撃っても爆弾にはなかなか当たらない。テイルは何度も撃ち続ける。幾つもの発砲の中、一つが爆弾に命中した。眩しい光を一瞬放ったかと思えば空気を揺るがす爆発音が響いた、その瞬間。

「落ち着け！」

キラの罵声が飛んだかと思えば、爆音の向こう側にキラの姿があった。滑り込むようにして、爆発の衝撃を受けながら一人の幼い少女を胸に抱いていた。

「女子供には手え出すな！」

予想外の罵声に、テイルは思考を取り戻す。暴走していた？ だんだんと肩口の痛みが戻ってきた。興奮してあがった息のまま、テイルはただ頷いて見せた。

キラは少女をしゃがみ込んで胸に抱き、他の村人を睨み付ける。少女は無表情のままキラを見上げた。

「—————」

少女が何かを言った。理解できぬ音はキラにも聞こえたようで、キラは少女を見た。少女は手に持っていた小さなナイフでキラの胸を突き刺した。

「キラさん！」

テイルが叫ぶと同時に、キラは少女を吹っ飛ばしていた。思わずの行動だったのだろう。キラ自身もはっとして唇を噛みしめている。慌ててテイルが駆け寄ると、キラは胸の傷を気にする風もなく、ゆらりと立ち上がった。キラは脱力しきった笑みを口元に浮かべた。

「……腐ってんな」

突如、キラの体に青白い電流が迸る。邪気に満ちた目で、キラは周りを睨め回した。



## 第4話

全てが終わり、燃えるものも燃え尽くしたのは深夜だった。灯りは消え、生臭い鉄の臭いと焦げ臭い煙の臭いが辺りに充満していた。青白い月明かりのみが二人を照らす。へたりとテイルはその場に座り込んだ。肩口、腕、足、あちらこちらにジクジクと痛みが走り、しかしそれ以上に心が痛む。キラを見ると、彼も又、あちこちに傷を受けていた。キラは何とも言えない複雑な表情で、燃え残った大きな木片にゆるりと腰を下ろした。

「傷、大丈夫、ですか」

まだ、恐怖と混乱とでうまく話せなかった。未だテイルの手はカタカタと震えている。

キラは素っ気なく「ああ」と答えた。

「吹っ飛ばさなきゃ、危ない所に達してた。本当の意味で壊滅なんて思ってなかったのに」

ぽそりとキラが呟いた。胸を刺した少女の事だと、テイルには直ぐに解った。『女子供に手を出すな』キラの怒鳴った台詞だった。しかし、村の生存者は一人も居ない。そう、一人も。そうせざるをえなかった。どうしようも無かった。異常だった。たった二人では、自分を守るのが精一杯だったのだ。異様な状態にある襲い来る者達を相手に殺さずに、など、余裕のある行動は出来なかった。

キラがチラリと視線を動かしたのを追ってテイルも顔を向けた。視線の先には、血で紅く染まった幼き子供の姿が転がっていた。テイルは慌てて顔を背けた。これが、自分のした事なのか。テイルは両手で顔を覆った。なんて事だ。気づけば涙が溢れ出る。熱い涙は頬のかすり傷にじわりと染みだした。

ふと、テイルは足に何かの感触を覚えて両手はずした。青白い月明かりに照らされてぬめり輝く、黒いぬるぬるとした、よく見れば太った大きな蜥蜴にも見える。片手で持てば、溢れるくらいの異様な物体が、テイルの足の甲に登っている。

なんだ、これは。テイルが思った瞬間、ぐにゃりと一度、世界が歪んだ。不意に喉の奥がひくひくと痙攣を始めたかと思えば、異様な音が予想も出来ずテイルの口からこぼれ落ちる。無意味な音を口から発する間、テイルの頭に低く震えた声が響いた。

「力欲しいか、弱き生き物よ。私が与えてやろう。変わりたいか、弱き生き物よ。私が変えてやろう。お前は必要な存在よ」

キラが驚いて自分を見るのが解ったが、テイルの意志は奪われていく。またテイルの喉がおかしく震えたかと思えば、今度は思いもしない台詞が口から転がり落ちた。

「お前が村を襲うのは私には解っていた。怒る者よ。自らの力で幼き頃に両親を失ったか。何が憎い？ 全てか？ 全てが憎いか」

テイルには、キラの表情がみるみる変わっていくのが見えた。しかし、どうする事も出来ない。ただぼんやりと、されるままに言葉を発する。

「お前は何をしたい。何を欲する？ 両親か？ 家族か？ 存在意義か？ よかろう。全てくれてやる」

「ふざけるな！」

キラが怒鳴って立ち上がった。

違う。俺じゃない……！　しかし、テイルにはどうする事も出来なかった。体は固まったまま。きっと殺した村人と同じような生気の抜けた顔をしていることだろう。再び喉が痙攣する。自分さえも理解できない音が口から零れ落ちる。また、声が頭に響く。

〔呑むがいい。弱き者。私を呑むがいい。すればお前は全てを得るだろう。くれてやる。お前の欲するもの全てを〕

次第にテイルは自分の思考が止まっていくのを感じた。抗う意志さえも、思考さえも無くなる。目の前の黒い、この蜥蜴のような生き物を、愛おしくさえ感じる。自らの体内にて、愛であれば全てはうまくいく。テイルはそっと足下の黒い物体を両手で掴んだ。愛しむように、優しく。ああ、なんと愛おしく神々しいお姿か。ゆっくり口を開く。ああ、愛おしい。

突如、頭の中に衝撃を受け、テイルの体はぐらりと揺れた。水気を帯びた柔らかい物が、地面に落ちる音がする。はっとすると、気づかぬうちにキラが目の前に立っていた。地面を見れば、真二つに切り裂かれた蜥蜴の様な生き物が、動かなくなっている。

「くだらねえ」

キラが呟くように言った。次第にテイルの頭は霧が晴れるようにはっきりしてきた。

洗脳か。俺は洗脳されかけていたのか。この様な不気味な生き物を愛おしいなんて。テイルは背筋が寒くなるのを感じた。呑み込もうとまでしていた。

「遺伝子操作か」

キラが呟いた。

人間の前には必ず動物実験が行われる。マウスからはじまって、ありとあらゆる生き物に実験されたのは、想像に難くない。推測するに、直接頭に語りかけて人を洗脳する蜥蜴の様な生き物とは、蜥蜴に遺伝子操作を行った結果生み出された生き物なのかもしれない。逃げ出したのか、はたまた不法投棄なのか。

この世は腐っている。

「大丈夫か？」

キラの問いかけに、テイルは小さく頷いた。

テイルは不気味な生き物の言葉を思い出していた。弱き者と、自分の事を言った。力欲しいか、と。変わりたいか、と。もやもやとした自分の感情を、はっきりと言葉として聞いた気がした。お前は必要な存在よ。最後の言葉は繰り返しテイルの頭で響いた。自分が組織に入った理由を思い出す。

両親を混乱する世界の中で失って、力が欲しかった。神の子という弱い自分が変わりたいと思った。そして、誰かに必要だとされたかった。組織に入って、神の子である弱小な自分は果たして力を手に入れられるのか？　変われるのか？　果たして自分は必要とされるのだろうか？　強くなれば、必要とされる？　任務をこなせる駒として？　それは望む形なのか。

「テイルが居て良かった」

突然予想もしない言葉が降って、テイルはキラを見た。ボロボロに汚れ、傷を、返り血を受けたキラは、白い歯をのぞかせて近い年の少年らしい笑顔を見せた。

「一人じゃなくて、良かったよ」

焼けた臭い。生臭い血の香り。絶望的な暗い光景の中で、自分に発せられた正直な一言だった。少なくとも、テイルにはそう思えた。

「テント、戻るか」

言ってから身を翻したキラからは、もう少年らしい姿は消えていた。テイルはゆるりと立ち上がる。体のあちこちに、裂けるような痛みを感じながらもキラの後を追う。

〈テイルが居て良かった〉

キラの言葉が、不気味な生き物の台詞に代わってくるくる頭の中で回り出した。まだ、成長しきっていない背中を見せてキラはどんどん歩いていく。ついて行こう。テイルは心から思った。俺は、ずっとこの人について行こうと。

全てが終わり、しんと静まりかえった大地に二人の少年の足音が響く。青白い月は二人を照らしだす。まだまだ、幼さ残る二人の少年を。

——END——

2004/03/21

手直し2019/01/03

## あとがき

---

本の紹介でも書かせて頂いたとおり

2004年とかそのくらいに遊んでいたファンタジー系PBCの中でお知り合いになられた方のキャラクターを拝借して書かせていただいたプレゼント作品でした。

PBCが解らない方は、ご自身が健全なんだって思われたまま生暖かい目で見てください。

PBCは当時エロ系も多かったのですが、私が出入りしていたのは健全なファンタジーでした。

キャラクター拝借の同人的な感じで書いた作品ですが

この時は「戦闘というものを描きたい」と思って描いていた気がします。

一応主人公のテイルくんが凄く弱い設定。

遺伝子操作が無い子を「神の子」って表現は2019年分り易く表現するために書き足したのですが考える時間をけちっただけに映画GATACAの表現そのままですね。

元々借りたキャラクターが遺伝子操作で電流使いになっていたのですが

GATACAはファンタジー要素はありませんが

同じく遺伝子操作の話だし、遺伝子操作が無い子供は弱くて「神の子」と言われる設定そのまま借りてて

ま。

無料だからいいかなあなんて、雑ですね。

GATACA大好きな映画です。

書き直してて思ったのですが、全てでは無いのですが割とヘタレた男の子を描くことが多いんだなあなんてなんだかしみじみ思って

別の作品で投稿させて頂いた時

選ばれなかったのですが選考の方に「これを書いた方にお会いしたい」と会っていただけた時に

「微妙にヘタレた男の子書くこと多いですね？ いや、私はそれが凄く好みなんですけど」

と言われた事を思い出しました。

そうか。

私はヘタレメンズを書くことが多いのか、と。

その時は

「私がSだからなんだと思います」

みたいな話をした記憶ですが

なんというか

人間誰もが結構ヘタレなところを持っていて

そこに向き合うことが出来て初めて強くなれる気がしているというのはあるんですよね。

今回の作中テイルくんも、そもそも脆弱設定ですが

メンタル的にも随分ヘタレです。

そして、まだ向きあえているのかいないのか.....

いないのでしょうということが多い設定になっていますね。

彼自身が弱くても、弱い事を自覚し、把握し、だから何をするのかと進めたとき  
彼は何より強くなると、私は思っていたりするんですよね。

いきっちゃう時もある。

目を背けたくなることもある。

でも、それで人に迷惑をかけるならクズ。

ただ、その弱さに向き合えた奴はクソかっこええ。

というのが、何処かあるんだという気もしたりするテイルくんです。

借り物キャラがあるので単発作品ですが

もし物語が進むならテイルくんは戦闘の上では策士に育っていくのだと思います。

そのプロセスは

自分の弱さに辟易して、悩んで、迷って

脳みそ絞って

育っていくのでしょ。う。

それはそれで、めっちゃんこカッコヨスだと私は思っていたりします。

2019/01/03